

菊の博学

- ・キク科キク属に含まれる宿根草で、学名をクリサンセマム・モリフォリウム(Chrysanthemum morifolium)といいます。日照時間の長い時期に成長して、日照時間が短く(13時間以下)なるとつぼみをつけ開花する短日性植物です。
- ・菊の開花時期は一般的に10月下旬から12月中旬です。旬は11月上旬といわれており、秋を代表する花です。

菊の歴史

- ・菊の原産地は中国で3,000年以上の歴史があり、日本へは奈良時代中期に遣唐使などによって薬用植物(解熱、頭痛、めまい、長寿など)として入ってきたと言われていました。
- ・平安時代には、9月9日の重陽の宴で花を觀賞し、赤白黄の綿を花にかけて菊酒を飲み、その綿で身体をぬぐう「着せ綿の行事」が行われていました。(老いを防ぐ効果があると考えられていました。)
- ・一般庶民に菊栽培が広がったのは、江戸時代中期の1710年代(正徳～享保)に花径18cm以上の大菊の新花を競う「菊合わせ」が盛んになった頃からです。入賞すると新花の苗1本が3両にもなったため一獲千金と名誉をかけて一般愛好家が交配実生に熱中し、次々と優れた品種が誕生しました。また、この時代に地域独特の古典菊も誕生し、江戸の植木屋が菊で富士山や名所の風景、菊人形などを作りはじめ、現在の菊作りの型がほとんど揃ったと言われていました。
- ・明治20年代には、各地に菊花会ができ、大菊三本仕立て(盆養)が流行し、その華を競い始めました。懸崖や盆栽は大正初めに流行し、以後広く作られるようになりました。
- ・日本で大きく発展した菊は、明治以降、世界各地に運ばれ、品種改良がなされました。オランダではスプレー菊、アメリカでは鉢花用のポットマムが発達しました。

菊の種類

- ・大菊(和菊): 花の直径が18cm以上で、花型によって「厚物」、「管物」、「広物」に分かれます。「厚物」は、更に「厚物」、「厚走り」、「大掴み」に分かれ、「管物」は、管の大きさで「太管」、「間管」、「細管」、「針管」に分かれます。また、「広物」は一重咲きの「一文字」と八重咲きの「美濃菊」があります。
- ・古典菊(和菊): 江戸中期に各地の殿様の保護奨励によって地域独特の発展を遂げた菊の総称で、昔の地名で呼ばれています。その種類には、嵯峨菊、伊勢菊(松坂菊)、肥後菊、江戸菊、美濃菊、奥州菊などがあります。
- ・小菊(和菊): 花の直径が9cm未満で山菊と呼ばれることもありますが、懸崖仕立てや盆栽用に育成された小輪の菊です。花色、花型、生育の特徴など極めて多彩で、種類が豊富です。
- ・洋菊類: 洋菊とは、欧米に渡った日本の菊がそれぞれの国の好みによって改良されたものの総称であり、クッションマム、ポットマム、スプレー菊などがあります。

菊の仕立て方

- ・大菊: 三本仕立て、一本仕立て、七本仕立て、千輪作り、競技用切花、ダルマ作り、福助作りなど
- ・古典菊: ほうき作り、七五三作り、天地人作り、篠作り、肥後菊花壇など
- ・小菊: 懸崖作り、杉作り、造形、ポットマム、クッションマム、盆栽作り、直幹仕立て、双幹仕立て、岩付け・木付け盆栽、盆栽懸崖、柳仕立て、筏吹き・根つながり、寄せ植え、木付けなど
- ・その他: 弥彦作り、菊人形、総合花壇など

問合わせ先

岐阜市都市建設部公園整備課

〒500-8701 岐阜市司町40番地1

TEL:(058)214-2184 FAX:(058)262-0512

岐阜公園管理事務所

〒500-8003 岐阜市大宮町1丁目46番地

TEL:(058)262-3951 FAX:(058)262-3951

第52回 岐阜公園菊人形・菊花展

～戦国武将ゆかりの地 岐阜～

開催期間:令和5年10月28日(土)～11月23日(木・祝)
AM9:00～PM5:00(※開催中無休、無料)

菊の愛好家たちの力作や、小学校の児童の皆さんが丹精込めて育てた作品が展示され、秋の岐阜公園を鮮やかに彩ります。
また、戦国時代の歴史的一幕を、美しい菊の衣装をまとった菊人形で再現しており、歴史好きな方も楽しんでいただける展示となっています。



【会場】岐阜公園(岐阜市大宮町1丁目)

【駐車場】普通車:堤外駐車場179台(310円/回) 鏡岩緑地駐車場279台(無料)

バス:18台(一回1,040円)・・・要事前予約

予約先(株)技研サービス TEL(058)213-6188

【アクセス】JR岐阜駅または名鉄岐阜駅からバス15分

「岐阜公園歴史博物館前」下車徒歩1分

※周辺駐車場は混雑が予想されますので、公共交通機関をご利用ください。

※ご来園の際は、手洗い・手指消毒、マスクの着用などの新型コロナウイルス感染予防対策にご協力いただき、ソーシャルディスタンスを守ってご観覧ください。

菊人形・菊花展案内図



戦国武将ゆかりの地 岐阜

岐阜でゆかりのある戦国武将と言えば数多くいるが、最も多く名前が挙がる人物は織田信長公である。永禄10年(1567)、妻濃姫の甥、斎藤龍興を追放し岐阜に入城した信長公は「井の口」と呼ばれていた地名を「岐阜」と改めるとともに天下布武を掲げ、天下取りに着手した。また、信長公は楽市楽座で経済を活性化させ、兵農分離では専門の戦闘集団を作り上げるなど、当時誰も思いつかなかった様々な政策を打ち出した。その後、天正4年(1576)、信長公は岐阜城を長男信忠に譲り、自らは安土城に移った。そして天正10年(1582)、本能寺の変で明智光秀公に討たれ、その波乱の生涯を閉じたのであった。

菊人形舞台テーマ

激動の時代の中心を生き抜いた信長公だが、政策だけでなく、戦においても画期的な戦法を編み出した。天正3年(1575)、三河地方の長篠城をめぐる、織田信長・徳川家康の連合軍と、武田信玄の息子・武田勝頼との間に勃発した長篠の戦いでは、優秀な騎馬隊を率いる武田軍を、織田・徳川連合軍は馬防柵と鉄砲で迎え撃った。信長公はこの戦で、鉄砲隊を三段に重ねて、第一隊が射撃を終えると後ろに下がり、第二隊、第三隊が撃つ間に弾を込める「三段撃ち」の戦法を編み出し、大勝。天下統一の悲願へ向けての大きな一歩となった。

山菊総合花壇

木付け、石付け等、5鉢以上の作品を組み合わせ、一つの花壇として構成したもので、他の地方では見られず本菊花展の特色を表すものです。



大菊花壇

大輪菊の三本立て12鉢もしくは、一本立ち20鉢をもって一つの花壇を構成したものです。



小菊盆養・盆栽

全国的にも珍しいこの地方特有の作風で、古木を主体にして小菊を育成しており、樹齢数十年を経て現在に咲き誇っているかのようです。小菊の特性を生かし、幹や根を強調し、盆栽風に仕立てており、数年栽培された古木も含まれます。



大菊小作り

7月頃に菊の芽差しを行い、比較的短期間に育成し花を楽しむもので、福助づくりが1鉢一本立てとして10鉢、だるまづくりは1鉢三本立てとして3鉢で一つの花壇を構成します。

福助づくり



自由花

この部門は、作者が自由な発想に基づいて育成した菊花作品を展示したもので、出展にあたっては大菊、新花、古花等、規定はありません。

千輪仕立て

1株でできるだけ多くの花を咲かせるよう仕立てます。100輪以上咲かせたものを千輪仕立てと規定しているところもあります。



美濃菊

皇室の紋章である一文字菊を祖先に持ち、岐阜が発祥の地です。花卉の表裏の色が異なるものがあり、一種の荘重味と鮮やかさを持っています。



だるまづくり

